

小樽史蹟

手寫古代文字

寺田貞次

国立国会図書館

549

103



始



HIT-26

北海道史編纂主任 河野 常吉 校閱
小樽市史編纂囑托
小樽高等商業學校教授 寺田 貞次 編
小樽市史編纂主任

小樽史蹟

手宮古代文字

附 忍路環狀石籬



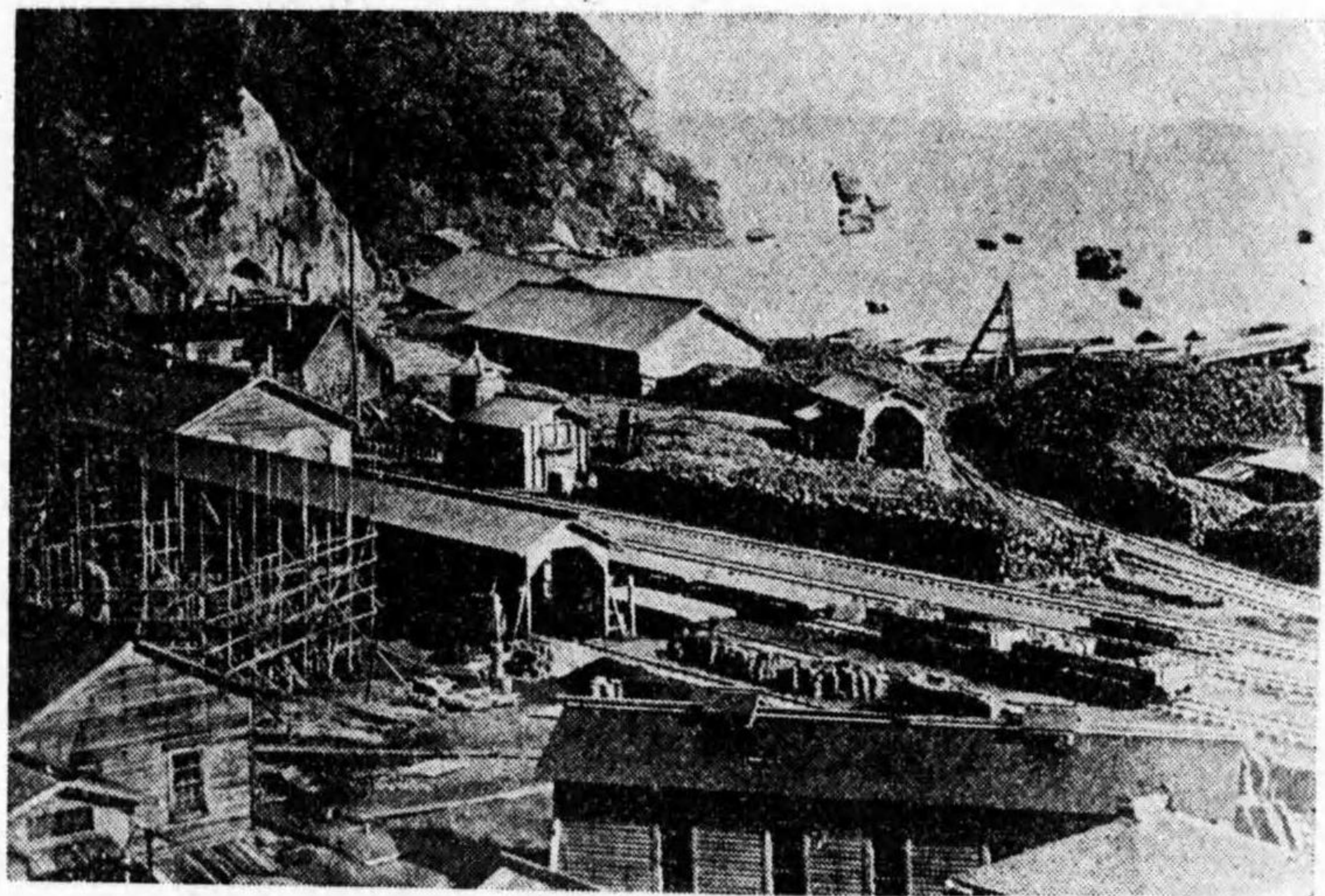
北海道史編纂主任 河野 常吉 校閱
 小樽市史編纂嘱托
 小樽高等商業學校教授 寺田 貞次 編

小樽史蹟
 手宮

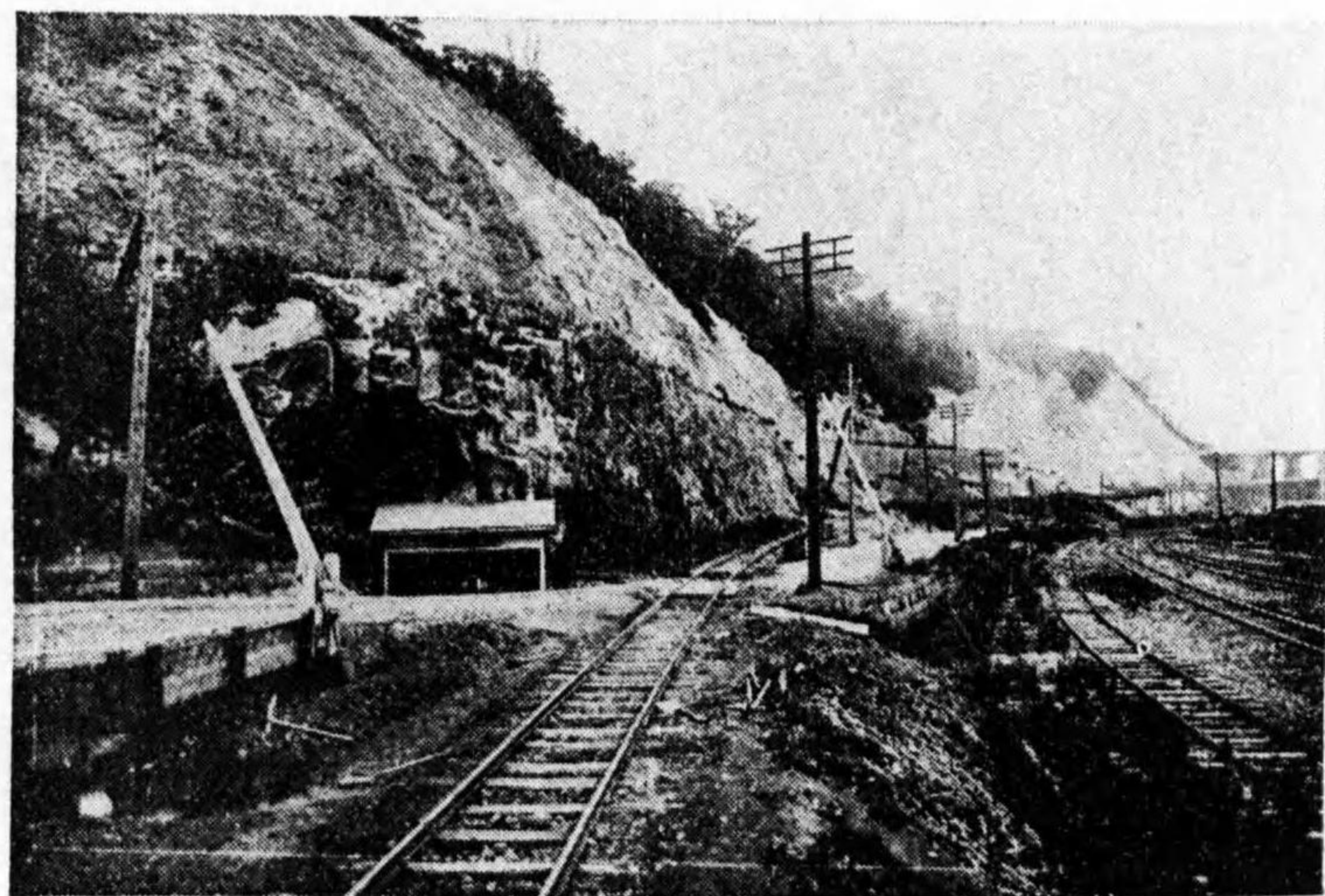
古代文字

附 忍路環狀石籬

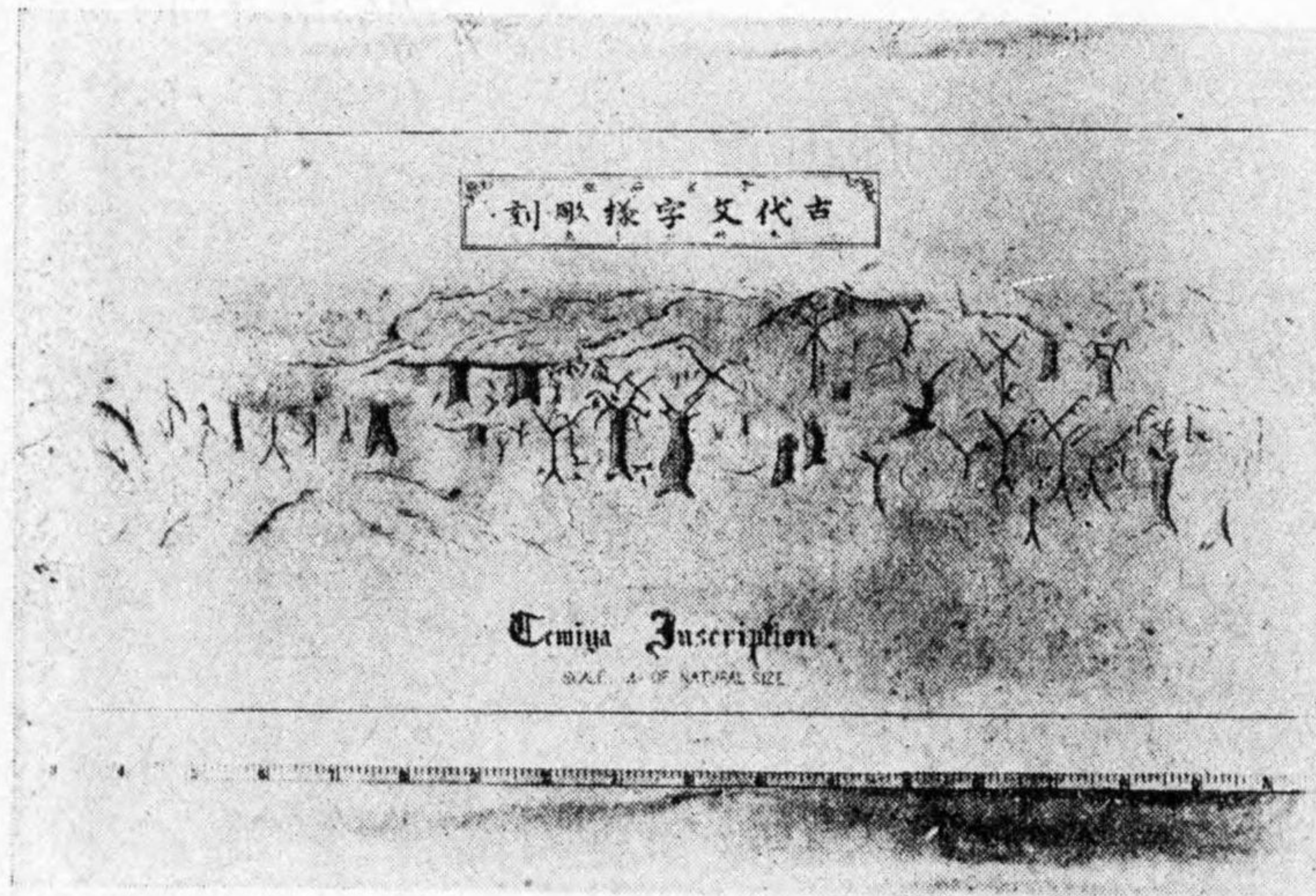
大正
 15. 8. 11
 内交



(年四廿治明) 景 全 窟 洞 宮 手



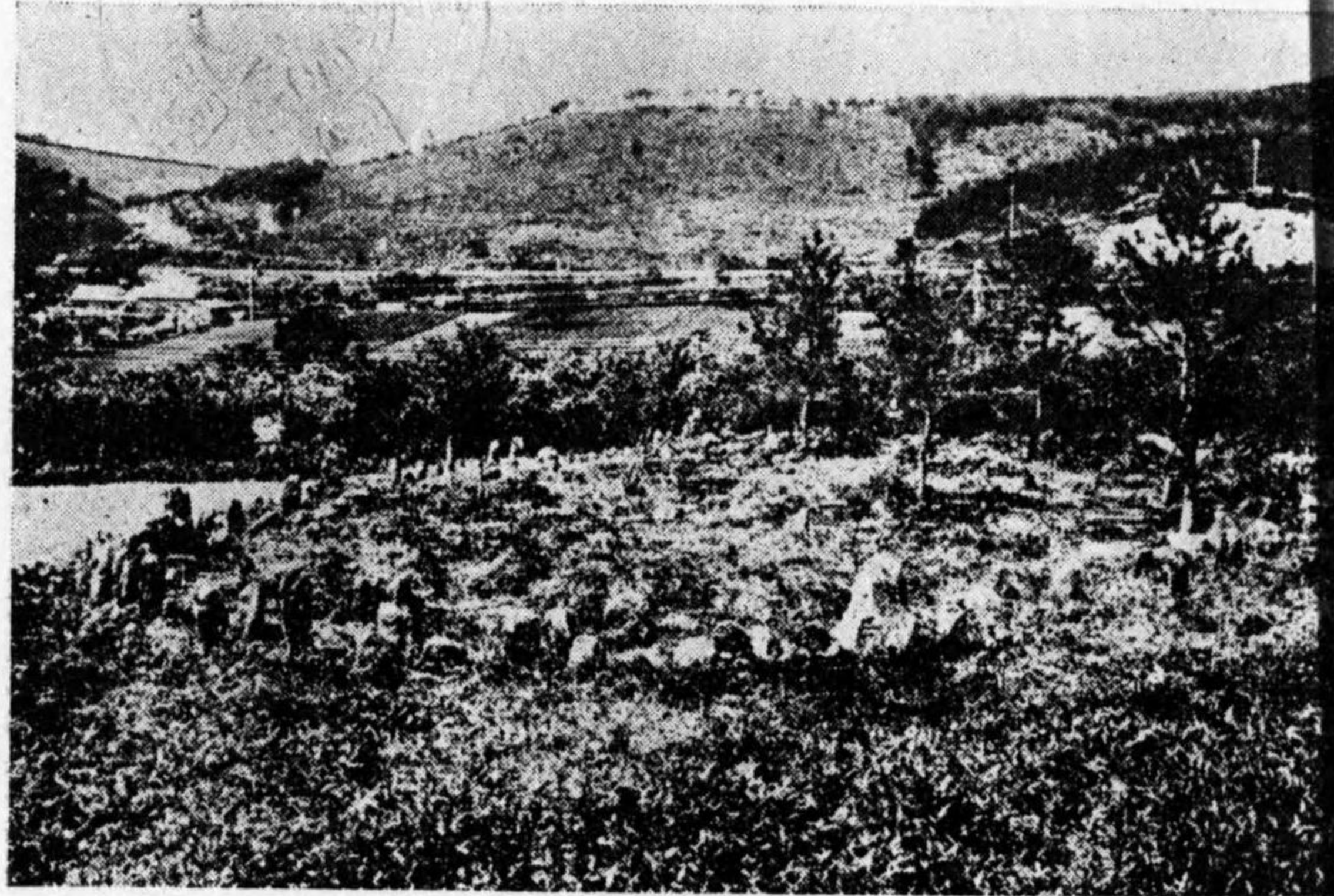
(今 現) 景 全 窟 洞 宮 手



(藏館物博幌札) (年三十治明) 寫模字文代古宮手



(今 現) 字 文 代 古 宮 手



籬石状環路忍



籬石状環ブカリキラ

緒言

手宮古代文字は北海道の一名績として、之に關する研究は從來各専門雜誌等に發表せられたるもの少なからずと雖も、纏まれるものにして。然かも權威あるものに至りては唯中目文學士の著「小樽の古代文字」を擧げ得るのみにて視察者の不便少しとせず、余等小樽市史編纂の任に當り、直接之が不便を感じしを以て、從來の學說を綜合し、小冊子とし聊其の欠を補はんとなす、幸に視察者の手引となり、將來研究の參考となるを得ば幸甚なり。

大正十二年八月

編者識

手宮古代文字

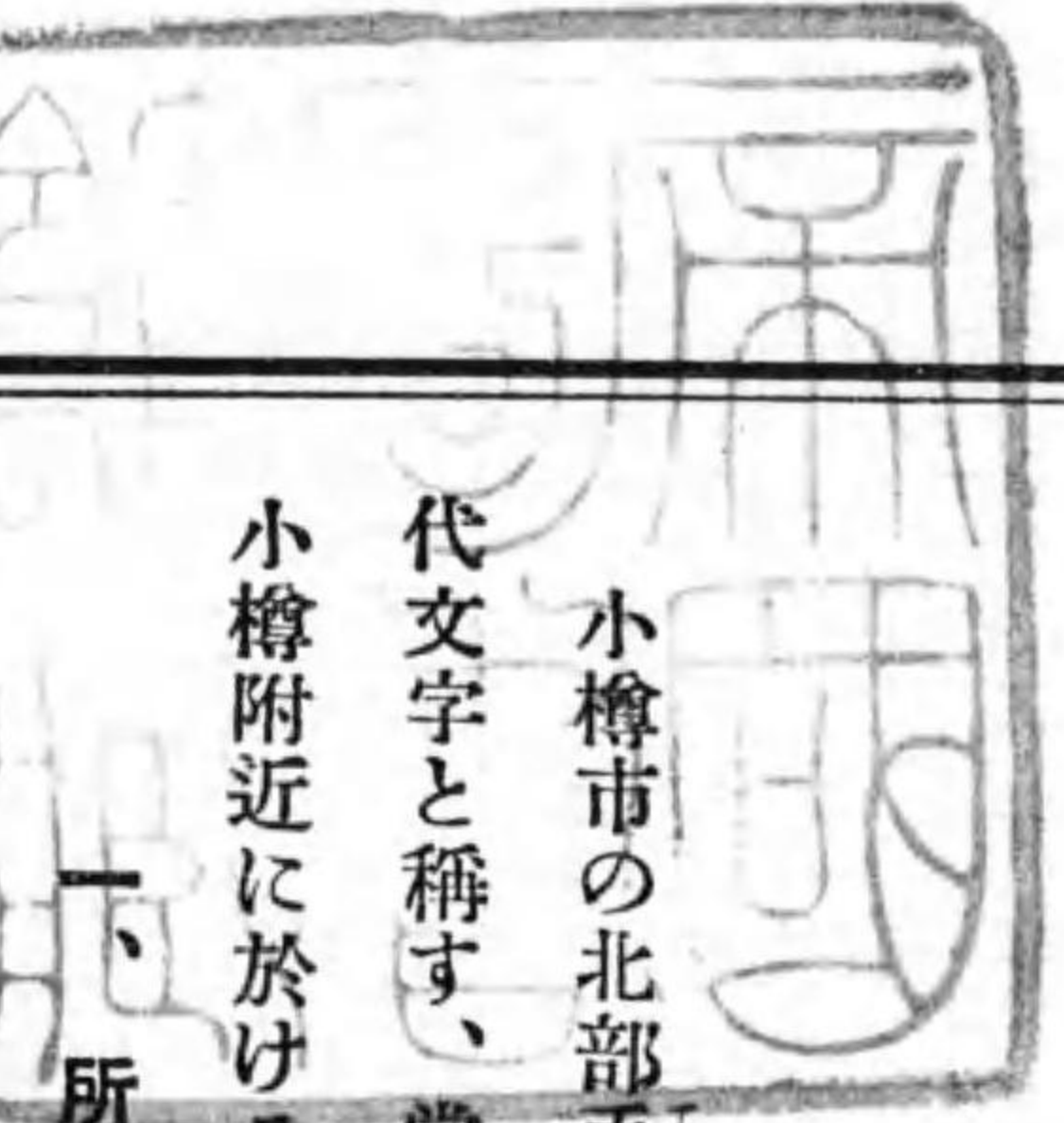
目次

- 一、手宮洞窟所在地……………三
- 二、沿革……………四
- 三、意義……………六
- 四、文字の讀破……………一四
- 五、結論……………二三
- 六、(附)忍路環狀石籬……………二四

手宮古代文字

小樽市史編纂室 寺田 貞次 編

小樽市の北部手宮海岸洞窟の一壁に文字様彫刻物在り、俗に手宮古代文字と稱す、當市を距る西方約三里にある忍路村環狀石籬と共に小樽附近に於ける著名の古蹟たり。



一、所在地

手宮町と高島村との堺をなす丘陵手宮公園の東端は一帶の斷崖にして、第三紀凝灰岩質より成る、崖下は直に波濤の洗ふ處なりしが、小樽港の發達と共に埋立地となり、曾て海軍省手宮煤田開採係、北海道炭礦

鐵道會社等の石炭圍場となり、現今鐵道省の貯炭場として使用せられ近時石炭積込の爲め附近に高架棧橋を建設し、洞窟上部崖地を開掘し鐵路を布設し高架棧橋に通ずるに至り、地形は僅々數十年にして著しき變化を來たせり、洞窟は南面し、彫刻壁は其の奥壁をなせしが、海岸利用と共に洞窟の前部は取崩され、彫刻壁は全く露出するに至れり。

二、沿革

手宮洞窟の彫刻は開拓使の時石を鑿りしによりて發見せり、明治十一年時の海軍中將榎本武揚開拓大書記官山内堤雲氏等此の地に數多の石器土器等の出たるを聞きて來觀し、因て此の彫刻を見寫して東京帝國大學に送れり、既にして風雨の剝蝕する所と爲り其の半を失ひ、尋て又崖崩れて露出する事若干あり、十三年開拓使を遣はし其の圖を模寫

せしめき、口繪に載するもの是なり。二十一年夏理學士坪井正五郎氏の實見せし時は、新に附けたる疵及び擦れ痕等ありて正しく模寫する能はざりしといふ。而して炭礦鐵道會社にては彫刻壁をおほふ木造建物を設け之を保存せり、今彫刻壁上部に存する四所は當時建物の遺蹟にして、此の建物は余の始て見し頃^{明治十四年}迄殘存せり、又明治三十年頃同會社に於て彫刻を明瞭ならしめんがため、手入を爲し朱を塗りたるがため、大に原形を損傷せり。後ち石炭用高架棧橋建設の爲め洞窟の外部は一層毀損せられ、彫刻は土砂の爲め大半埋没に歸せしを、土地の有志遺蹟の湮滅を嘆じ、漸くにして土砂を取除き之が保存に盡力せり、然れども之が爲め彫刻は著しく剝落減少し、現今殘存せるものは發見當初に比し、其の三分の一にも足らず、大正七年市の有志相計

り保存會を組織し、之が修理を加へ、金網張の建物を設けて之を保存し、最近には日本史蹟名勝紀念物の一に加へられ、益々世人の注意を引き、本邦有數の彫刻壁として來觀者多く、畏くも明治四十四年八月聖上陛下皇太子殿下として本道御巡啓の砌、竝に大正十一年七月攝政宮殿下御巡啓の際何れも御台覽の榮を得たり。

三、意義

手宮彫刻は自然に出來しものなりや、將た人工的の彫刻物なりや、若し人工的彫刻とせば何人が何の目的を以て刻せしものなりやに付ては、學者の研究少からずと雖も、要するに諸説紛々未だ確定するに至らず、然れども從來の研究に依れば、此の彫刻は自然に成りしものに非ず、何等かの目的を以て人工的に彫刻されしものなりとの考は一般

に一致せり。

然らば此の彫刻は何時代に於て誰に依りて造られ、其の目的は那邊にありしか、故文學博士重野安釋氏は之を以て後人の彫刻なりとし、又地質の方面より觀察し、彫刻壁岩質の脆弱なる長年月に堪へ得べきものに非ずとの論據により、此の彫刻を以て一般に信ずるが如き古代のものに非ずとなすの説も少からずと雖も從來其の製作の新古、目的の如何を論ぜず、兎に角或る民族の彫刻せるものならんと云ふ説に一致し居れり。

若し此の彫刻の人工的に成りしものとせば、果して文字なりや將た繪畫なりや、彫刻中甲冑の如き形象あるを以て武人を畫ける繪畫なりと云ふ者あり、坪井理學博士^{初め理學士}は個々の彫刻が頭無しの人形の形に

似たるを以て多數の死人の記念なるべしといひ、又喜田文學博士は最近之を觀、彫刻の形態同一なる點より推し、此の彫刻は文字に非ず、森林を表はせる繪畫に非ずやと稱せらる、然れども又文字なりと考ふる説も多く、文學博士鳥居龍藏氏は人類學上より研究し、之を我が史實と對照し、歴史的の考證をも試み、手宮彫刻は早く此の地に移住せしアイヌ以外民族の彫刻せし文字にして、字體は所謂突厥文字、其の言葉(發言)は突厥語つがいか然らずんば肅慎語しゅくしん(靺鞨語もつかつ)にして、恐くは後者即ちツングース語ならんと論ぜられ、「歴史地理」大正二年十月號、北海道手宮の彫刻文字に就て當時廣島高等師範學校教授たりし文學士中目覺氏現大阪外國語學校長は兩度樺太に渡り、ツングース民族(Tunguses)語を調査し、ニクブン文典、オロツコ文典編述に當り、之を視察し、此等語學を根基とし、ラドロフ氏著蒙古に

於ける古代土耳其文碑銘 (W. Radloff, Die altturkischen Inschriften der Mongolei) 所載土耳其文字と比較し、手宮洞窟内彫刻は古代土耳其文字なりと斷定せり。「尙古」第七十一號、我國に保存せられたる古代土耳其文字

然らば、此の地方にはアイヌ民族以外、異民族の早く移住せし證跡ありや、此の點に付ては大要左の諸項を認むるを得。

(イ) 地形上小樽灣は日本海に面せる唯一の良灣にして、地理上より考察し、若し對岸大陸方面より海路來道せりとせば、上陸には自然手宮灣を利用せしに相違なし。

(ロ) 對岸大陸地方に於ける唯一の交通路は黑龍江(Amur)にして樺太並に北海道は其の南に横はる、故に大陸民族の南下には必ず此の自然的通路に依り江を下り、樺太沿岸より本道に來り、小樽灣に上陸せしを

想像せしむ。

(ハ) 對岸大陸に居住する民族は所謂ツングース族にして、現今樺太に見るオロツコ族等は之に外ならず、從て其の南に位せる本道にも早く此の種民族の來住せし事ありしを推考せしむ。

(ニ) 本道内に發見する先住民の遺物には石器土器を始めチャシコツ・堅穴・竝にストーンサークル環状石籬土城等在り、就中チャシコツ・堅穴等は全道各地に分布せるに反し、ストーンサークル及び土城は道内にては石狩・後志方面に限られ他に之を見ず、即ち西部北海道に存し本道一般に分布するアイヌ遺蹟とは自ら其の性質を異にす。

而してストーンサークル及び土城は對岸黒龍江上流地方に残存せる遺蹟に類似せるに反し、我が國本土には之を見ざるのみならず、北海

道に於ても其の地を局限せるが故に此の遺物はアイヌ族の物に非ずして寧ろ他の北方民族の殘せしものと考ふる方至當なり、此の點より推し、往古本道に於て少くとも遺物分布區域たる後志・石狩方面にはアイヌと共に對岸大陸民族の移住ありしを認め得べく、現今本道各地より發見する石器土器の如きアイヌ族の遺物以外、異民族の遺物をも混ざる事を察せざるべからず。

斯く、此の地方には或る時代に於て、アイヌ族と共に對岸大陸民族の居住せしを認むる時は、手宮古代文字の如き自然之と關聯して考究する必要を生ず、而して國史中之に關係あるは日本書記齊明天皇の條にして、其の四年西曆六五八年には阿倍比羅夫船師を率ゐて北征し蝦夷を懷柔し肅慎を討ち、次で五・六兩年に於て又之を討征せり、殊に六年

三月の條は最も關係密接なるを以て、左に其の譯文を掲ぐ

六年……三月、阿倍臣を遣はし、船師二百艘を率ゐる肅慎を伐つ、阿倍臣陸奥蝦夷を以て己が船に乘らしめ、大河側に到る、是に於て渡島蝦夷一千餘海畔に屯聚し河に向ひて營す、營中二人進んで急ぎ叫びて曰く、肅慎の船師多く來る、將に我等を殺さんとする故に願はくは河を濟りて仕官せんと欲すと、阿倍臣船を遣り喚び至らしむ、兩個蝦夷に賊の隠るゝ所と其の船數とを問ふ、兩個蝦夷便ち隠るゝ所を指して曰く、船二十餘艘と即ち使を遣し喚ばしめたるも肯じ來らず、阿倍臣乃ち綵帛兵鐵等を海畔に積みて貪り嗜ましむ、肅慎乃ち船師を陳べ、羽を木に繫け舉げて旗と爲し、棹を齊して近づき來り、淺き處に停り、一船の裏より二老翁出て、廻り行きつゝ積む所の綵

帛等の物を熟視し、便ち單衫に着換へ、各布一端を提げ、船に乗りて還り去る、俄にして老翁更に來り脱ぎ置きし衫に着換へ、竝に提げたる布を置き船に乗りて退けり、阿倍臣數船を遣し、喚ばしむ、肯じて來らず、幣賂辨島へろべに復る食頃しほらくして和を乞ふ、遂に聽さず、己が柵に據りて戰ふ、時に能登臣馬身龍敵の爲に殺さる云々。

之に依れば、當時渡島邊アイヌ居住地は他の民族たる肅慎と界を接せしを察し得べく、アイヌ族は之が爲め屢々被害を蒙り、我が大和朝廷に救を求む、朝廷にては武臣を遣し異民族を撃退し、アイヌの安全なる居住地たらしめし事を知る、而して當時の肅慎國とは肅慎人居住地の意にして中目文學士著「小樽の古代文字」蘇軾墓誌に就て肅慎人は後世の所謂靺鞨人もっかつ即ち黒龍江畔に居住するツングース民族なれば、當時の肅慎國を渡島に近き地

方即ち後志地方より石狩方面なりと考察せば之に付ては諸説あり此の方面には又ツングース族の早く移住せしを推知し得べし。

上述の如く一方、遺物上より之を研究すると共に、又記録上よりも之を考察し、後志・石狩地方に於て對岸大陸民族即ちツングース族の移住ありしを認めしを以て、中目覺氏は更に阿倍比羅夫の古事を以て手宮古代文字と連結し、手宮洞窟を以てツングース族終焉の地と考へ洞窟彫刻を以て一種の墓誌中目氏著「鞅鞅墓誌に就て」ツングース文典より研究し、彫刻に一種の意味を附し、鞅鞅人の遺跡なりと云ふ點よりして鞅鞅窟と名づけ度き希望を發表せられき。

四、文字の讀破

古代文字の研究は泰西にては盛行はるゝ事にして、未知の新事實

は之に依りて發見せらるゝ事少からず、手宮彫刻の如き外人の調査せる者多きを以て、萬一外人の手に依りて讀破せられんか、我が學界の耻辱之に過ぐるものなけん、故に手宮彫刻にして若し文字なりとせば之を研究し何等かの意味を附するは是れ邦人の務にして、又我が學界の進歩と云ふべきなり、中目覺氏談中目文學士は此の意味に於て氏の専門たる語學、殊にツングース語の造詣を以て之が研究を試み、ラドロフ氏の著に依り、此の字體の古代土耳其文字に類似せる事を認め、此の地の對岸大陸民族に關係ありと云ふ見界よりして、ツングース語上より之を論究し、遂に一種の意味を發見し、現存せる文字の意味を以て「……我は部下をひきゐ、おほうみを渡り……たたかひ……此洞穴にいたりたり……」

とし、大正八年三月之を發表せり、中目氏著、「小樽の古代文字」尙古、小樽新聞然れども此の讀破に付ては素より異論多く、北海道史編纂主任河野常吉氏、東京帝國大學理學部教授文學博士鳥居龍藏氏の如きは文字の讀み方に於て根本的異論を有し、中目文學士の縦讀に反し、兩氏は横讀を主張せられ、又鳥居博士は此の遺蹟に付ては將來尙研究の餘地多きを以て輕忽に斷定すべきものに非ず、暫く意味を附せざる方至當ならんとの意見を有せらる、鳥井博士書翰吾人は素より中目氏の讀破を以て古代文學の意味確定せりと云ふものに非ずと雖も之が爲め此の遺蹟は一層世人の注意を引き古代文字研究の動機となりし事は悦ぶべき現象にして、京都帝國大學文學部羽田文學博士の如きも之が研究に著手せしと聞けど、未だ發表の運に至らざるを以て、中目覺氏の研究を左に載録し將來考究者の

參考に資せむとす。

【尙古所載大正七年二月】此彫刻した文字なるもの、右半分が、繪はがきに現はれて居るのを見ると、右端にある繪の磨滅した様なものを除けば上下に長い明瞭な模様が三行ある、鳥居氏は横に書いてあると云はれるが、私は縦に書いてあるとしか思へぬ、而中の行と左の行との間に γ と α と二つの文字が狭まつて居る、此等の模様の特色とも見るべきことは、どの模様も縦の線に對して、シンメトリ Γ をなして居ることである、上下に長いから下へ讀むものとの想像もつく、私が此彫刻が古代土耳其文字に似て居ることに氣付いたのは主として Γ と γ と α とからである、而古代土耳其文字を見ると、此三字が悉くある。



（載所著氏フロドラ） 銘碑文其耳土代古の在所古蒙

但し横と縦との違ひがある、そこで私は色々の假定をして見たが、結局シンメトリーを保ち爲めに或文字は横に書いたのであるといふ推定をした、即ち古代土耳其文字の「 \sim 」は縦線に對してシンメトリーを爲して居らぬから、此等の文字は横に書かれて「 \sim 」となつて居るものと見た處推定は間違はなかつたのである古代土耳其文字は横にも縦にも書いてあるのである、そうすると

右の行	$\times \times \times$	は	$D \times \times \times$	JRODR
中の行	$\times \times \times$	は	$\times \times \times$	SRRB
左の行	\times	は	$\sim \sim$	DOO

となる、それから中の行と左の行との間にある「 \times 」は「 \times 」(R)で「 \times 」(J)を横に書いたものと讀まれる、この書換はラドロフ氏に據る。此様に考へれば、手宮洞穴内の彫刻が古代土耳其文字の應用であるといふことは誰も異議があるまいと思ふ、然らば之で現はされた言語は果して何語であろうか、言語も古代土耳其語であるか、それとも他の國語を古代土耳其文字で書いたものであらうか……然らば北海道の對岸には昔からツングース人が居るから、ツングース語を古代土耳其文字で書いたものであるまいか。

滿洲語には右彫刻文に似た言葉がないかと探して見ると、無いこともないが、グルーベ著「ゴルデ語集」に據ると、尙一層明瞭なものがある、即ち

Jera, Jeragu 率ゐる、導く。

Joro(nanu) 大海。

Sori, 争ふ、闘ふ。

M. sorre. O. sorre. (M. はマキシモキツ氏に據るゴルデ語、O は同氏に據るオルチャ語) 以上はグルーベ氏に據る。

dosi-mbi 入る。

以上はアルレー氏著「滿洲語文典」に據る。

此等の資料から彫刻文を書換へると。

Jero dero (nanu) 率る、大海。

Sorribi 我は闘ひ。

doei 入りたり。

となる今磨滅した文字を想像して見ると、大様次の様な意味を彫刻したものはあるまいか。

……我は部下をひさる、おぼうみを渡り……たたかひ……此洞穴に入りたり……

然ば此言葉は何語であるか、先に云た通り滿洲語に似ないこともないが、夫よりも「ゴルデ語集」の語に能く似て居る、然しオロツコ語迄は達して居らぬ、オロツコ語では大海は Dorajje nanu (オロツコ文典)である、又 sorribi の bi はどうも單數一人稱の動詞の語尾らしく思はれ、従て此言語は東ツングース語に屬する様に思はれる (オロツコ文典)次に doei は滿洲語の dosi と同意義らしく思はれる オロツコ語には do(内)といふ名詞があり、dodu とすれば副詞とな

り、是亦同じ語源の言葉らしく思はれる、而彫刻文には過去動詞となつて居る、どうして夫が分るかと云ふと、此動詞はオロツコ語の *timbi* 動詞に當るもので、オロツコ語では之から人稱語尾を取去ると *ti* が残る、此人稱語尾を略した過去の形が「オロツコ文典」中の「オロツコ譯桃太郎の話」の中に澤山出て居る、彫刻文の *ti* はオロツコ語の *ti* に相當すると思はれるから *ti* で終る動詞は過去かと思ふ。

右の如く滿洲語よりはオロツコ語に近いが、オロツコ語とも少し違ふ、其處で私は滿洲語とオロツコ語との中間に位するが、東トングース語に屬するもので、烏蘇里地方の住民の言葉であると思ふ、私は之を靺鞨語と名づけたい、即ち手宮洞穴の彫刻は古代土耳其文字

を應用して書いた靺鞨語の文章であると信ずるのである。

五、結 論

以上述べ來りたる處に依り、手宮洞穴に關する諸學者の研究を綜合するに、手宮彫刻は兎に角人工的彫刻物にして、之を彫刻せし人間は早く此の地に移住せし對岸大陸民族と見るべく、古史に徵する時は將に阿倍比羅夫の古事に相當し、我が大和民族北方發展を物語る貴重な遺蹟となる、然れども此の説たる素より確定的のものに非ず、最近來道大正十二年七月十二日せる京都帝國大學文學部教授文學博士喜田貞吉氏の如きは手宮洞窟を以て全く後世の開堀にかゝり、從來思考せしが如き古きものに非ず、阿倍臣の事蹟に附會するが如きは笑ふべき事なりと論ぜられ、喜田博士談將來益々多數識者の研究を待つに非れば其の真相を伺ひ

得べきに非ずと雖も、苟も一千二百餘年の古に於て、異民族の跋扈を挫き、皇威北展の基礎を開きし古事を追懐するには絶好の記念地たるを以て其の説の如何を論ぜず余は本道の名蹟として永遠に保存すべきものなりと思考す。

六、(附)環状石籬 (Stone circle)

ストーンサークルは普通圓形に周圍に石を樹て連ねたものにして、環状石籬と譯す、其の形態大さ圓形又ハ方形等、石籬の單複一様ならず、用途の如き或は祭祀場、寺院、天體觀測場、居宅地並に墳墓等諸説ありて一定せず、就中墳墓説最も信ぜらる、マンロー氏は忍路環状石籬を調査し、サークルの外側に目標石を發見し、天體觀測場と考へ、サークルの中心點と目標石とを連結する線上に太陽の來れる時を以て夏至冬至を定めしものなりと説けり(「マンロー」著有史以前の日本) 北海道にては此の遺蹟は後志・石狩地方に分布し、後志國忍路郡忍路村二箇 岩内市街一箇

(高畑宜一著 小樽港史) 渡島國上磯郡泉澤村字鷹堂阿部正巳、鳥居龍藏氏等論文 石狩國空知郡音江村

字オキリカブ 稻見山東京人類學會雜誌(明治二十七年十二月號)高畑宜一報、同雜誌大正七年一月號、阿部正巳氏論文、北海道史附圖、新聞、阿部正巳氏著、北海道の先住民 等に在りし由なれど多くは取除かれ、現存せるものは僅に忍路に一個及びオキリカブ 稻見山に十餘個あるに過ぎず。

おしよろ 忍路の環状石籬は小樽市の西方約三里忍路村字土場どはの澤に在り、蘭島停車場の東方數町三笠山の麓に位し、二細流の合流點に當れる景勝の地を占む、規模オキリカブの夫に比し稍大にして徑東西拾五間四尺南北拾二間二尺阿部正巳氏調査 隋圓形に自然石を樹て並べ、周圍石數約三百 今官有地として荒蕪に委す、城内數株の松樹を植ゆ 最初は石の數も多く入口東北 及び中央部には高さ六七尺の石柱ありし由傳れども今は存せず阿部正巳著、北海道先住民 附近には鑿穴無數に存在し、石器土器の發見多く、殊に珍奇なる遺物多かりき大

正十一年七月攝政宮殿下行啓の砌、小樽區當時區長大味久五郎氏にては之か遺蹟の調査を試み、忍路村有志、同青年會の助力を得、各所に散在せし石材を舊位置に復せしめ、大に舊形を保存し得るに至れり、此の遺蹟に付ては早くより注意せられ明治十九年渡瀬庄三郎博士の論文東京人類學會雜誌「エヌ・ジ・マンロー氏の著「有史以前の日本 Prehistoric Japan」明治三十六年を始め人類學雜誌、考古學雜誌、歴史地理等に於て論せられしもの少からず、歴史地理河野常吉氏論文、北海道人類學會雜誌阿部正巳氏調査考古學雜誌寺田貞次報告從來手宮の彫刻と共に難解物の一たりしが、近時各地に於ける遺蹟遺物の研究發達と共に此の遺蹟の意味にも一條の光明を添へ、大様左の理由に因り、對岸大陸民族の遺蹟なりと考へ得るに至れり。

(イ) 環状石籬を建設せしは何族なりや、アイヌ民族は之に付て知らず

(鳥居氏に依る)と云へばアイヌ以外民族の手に成りしものと考へざるべからず然らば其民族は何族なりや、遺蹟の分布上より觀察するに此の遺物は從來我が本土には之を發見せざるに反し、大陸にては英國の北部スコットランドを始め各所に存在し、我が對岸亞細亞大陸にてはバイカル湖の南より興安嶺更に朝鮮の咸鏡南道の海岸地方に分布し、更に海を渡りて我が國の一部に之を見る、一は北海道の遺蹟にして、鳥居博士論文に依る他は九州の遺蹟なり、(文學博士喜田貞吉氏談、社會史研究第九卷三號豊後國東半島の鹿垣)されば、此の遺蹟は大陸民族の建設せしものと考へられ、從て遺蹟の存する北海道の一部後志・石狩方面は大陸民族と早くより關係ありしを考察せしむ。

【亞細亞に於ける遺蹟の例】バイカル湖の南、オルコン河畔(我が國、百六十三號鳥居龍藏博士論文、北海道の環状石籬に就て、W.

Radeoff, Sitas der Sletterhürner der Mongolei, 1892) 東蒙古興安嶺の西烏珠穆沁サーメン地方(鳥居博士著、Population Primitives de la mongolie Orientale, 1914) 朝鮮咸鏡南道端川郡利下面嘉山里陽城丘下同道北青郡下天里(鳥居博士論文)

(ロ) 北海道には環状石籬の外、土城と稱するもの有り、圓形に圍らせる土壘にして、今石狩河支流の上流たる、膽振國千歳郡千歳村キウス(室蘭線追分驛の北里餘、馬追湖南岸、キウス小學校の西數町、千歳街道畔)に在りアイヌ族の遺物と異り、大陸的色彩を帶べるものと考へらる、(阿部正巳、鳥居龍藏氏等論文)此の點より推すも北海道の一部には大陸民族の會て居住せし事ありしを察せしむ。

以上の理由に因り環状石籬は手宮の彫刻と共に對岸大陸民族即ちツングース族の遺蹟として觀察すべきものにして、本道に取りては貴重なる遺蹟たるを失はず。

【終】

大正十五年七月卅日印刷
大正十五年八月三日發行

手宮古代文字

定價二十五錢

版權所有

著作者

寺田貞次

小樽市高等商業學校内

發行者

左文字万造

小樽市花園町東一丁目六番地

印刷者

安田徳治郎

東京市神田區實業町一番地

發兌

小樽市花園町

左文字勉強堂

電話一七六六番
振替小樽一三八五番

健捷堂印刷所 印刷

終

